

卒業論文・修士論文・博士論文題目一覧

2019年3月～2020年3月

卒業論文

2019年

- | | |
|-------|--|
| 荒 瑞穂 | アニメ聖地巡礼による観光の可能性に関する研究
－近年の新しい聖地をめぐって－ |
| 伊藤 大基 | 再開発事業に伴う住民主体の地域活動組織の実態
－二子玉川地区と武蔵小杉地区のエリアマネジメント政策を例に－ |
| 稲垣 裕也 | 兼業稲作地帯における農業構造の変容と担い手像
－三重県いなべ市畑新田地区を事例として－ |
| 尾家 崇史 | 露地野菜産地における担い手の再生産
－兵庫県南あわじ市を事例に－ |
| 金巻 恭弘 | 台湾における農村移住の特質と可能性
－台東県鹿野郷の就農者を中心に－ |
| 塩谷 萌 | 歴史的町並みにおける展示施設群の運営と連携
－栃木市「蔵の街」を事例に－ |
| 住吉 康大 | 多様化する「二地域居住」と受容地域
－千葉県南房総地域における実態把握を踏まえて－ |
| 村岡 紗綾 | 夜間経済活性化の現状と課題
－渋谷区を中心に－ |
| 山崎 恭平 | 山村における世帯経済と農業の継続
－邑南町布施地区を対象に－ |
| 山本 涼太 | 東京都山谷地域における寄せ場機能の弱体化と支援体制の変化 |

2020年

- 金子 亮大 高齢者のみ世帯による手段的サポートの利用実態
－佐賀県玄海町を事例として－
- 根津 駿介 野生動物管理の現状と問題点
－石川県白山市を中心として－
- 羽田 野太貴 「道の駅」を核とした地域コミュニティ再生の可能性と限界
－地方創生関係交付金を活用した小規模自治体を事例として－
- 堀田 みと 地方自治体における人口減少問題に対する認識調査と政策展開の考察
－関東圏の中規模市町村を事例として－
- 峯岸 祐介 県境地域における広域連携の展開と限界
－中海・宍道湖・大山圏域を事例に－
- 村井 廉 自動車リサイクル産業とアフガニスタン移民
－千葉県四街道市と佐倉市を事例として－
- 山本 卓登 中山間地域における地域公共交通の運行形態と利用実態
－長野県下伊那郡阿南町を中心に－
- 横田 祐季 聖地巡礼を通じたアニメファンの地域愛着と聖地移住のプロセス
－『ラブライブ！サンシャイン!!』聖地静岡県沼津市の場合－

修士論文

2020年

- 古河 佳子 地方町の観光まちづくりが抱える閉塞感
－東城まちなみ保存振興会を事例として－
- 高瀬 隼 沖縄県島嶼部におけるリゾート開発と住民組織の対応
－竹富島と久高島の事例－

博士論文

2019年

- 申 知燕 グローバルシティにおける韓人の国際移住およびエスニック空間に関する
地理学的研究
- 小泉 佑介 インドネシア外島におけるフロンティア空間への移住と開拓

2020年

- 王 天天 転換期中国都市における郊外の形成と住民のライフスタイル
－北京市の事例－

あとがき

「このウイルスはなかなかてごわい。」COVID-19の問題が日本ではまだ対岸のできごとのように思われていた頃、専門家らが発したコメントである。あれからおよそ1年半、われわれはなかなか「思うようにならない」この感染症との関係の中を生きているといえるだろう。学際科学科地理・空間コースの巡検も、2019年度冬学期、2020年度夏学期・冬学期と実質的に実施できなかった。この先も楽観を許さない。インターネットの情報や通信手段を駆使したとしても、フィールドから遠ざかりその感覚を肌身で感じることなく人文地理学分野の教育・研究を進めることには、やはり大きな限界を感じざるを得ない。

さて、前号の発行(2018年度)以降、人文地理学教室ならびに地理・空間コースのスタッフには多くの異動があった。2019年度末には、長年教室運営、教育・研究の屋台骨となってきた荒井良雄教授と、地理・空間コースの教育に建築学分野から熱意を持って取り組まれた加藤道夫教授が定年退職を迎えた。また鎌倉夏来助教が東京大学全学の11部局が参画する地域未来社会連携研究機構の准教授に就任し、後任として田中雅大助教が着任した。さらに同年度末、まさに縁の下の力持ちとして長きにわたり教室事務を支えてきた渋谷桂子氏が定年退職を迎えた。また数次にわたり教室図書室の事務を担当いただいた川村素生氏、亀井順子氏もそれぞれ2018年度末、2019年度末で退職した。教室スタッフという意味では身内となるが、渋谷氏、川村氏、亀井氏の長年にわたる教室運営への貢献に改めて厚く感謝申し上げたい。教室事務の後任には池田美沙子氏が着任した。教室図書室の事務は、2020年度は金景彩氏、2021年度からは島田貴史氏が担当している。

教室・コースの陣容は変われど、駒場のこの小さな空間が、地理・空間に関わる諸テーマの活気ある教育・研究の場となるようスタッフ一同尽力していく所存である。引き続きご指導・ご鞭撻を賜れば幸いである。なお本号より若干体裁の変更を行っているが、本誌全体のレイアウト作業は大学院修士課程の山崎恭平氏に担当いただいた。ここに記して感謝申し上げる。

2021年7月

永田 淳嗣